

音楽ある生活作り手助け

中央区月島にある貸しスタジオと音楽教室を併設した「ピアノアートサロン」は、都内では、クラシック専門の貸しスタジオのさきがけ。オープン当初から倉林京子さん（56）が一人で切り盛りしてきた。

ピアノの調律は毎月欠かさない。使い終わった楽器はすぐに汚れを布で拭き取り、使う人の身になることを心がける。「『女性だから、どうせ趣味でやっているんでしょ』と思われるのは嫌で、慎重に仕事をしてきた」。そんな仕事ぶりが、演奏家に信頼されている。

大学では音楽理論を学んだ。30歳で学芸員の資格を取り、76年、女性の学芸員仲間と会社を作った。裏方として芸術家の表現活動をコーディネートする仕事。やがて、クラシックの演奏家が「思いきり練習できる場所が少ない」と嘆いているのを知り、貸しスタジオの経営が頭に浮かんだ。

78年秋には、3階建てのボウリング場の2階にある空き部屋を見つけた。ここなら周囲に気がねなく音を出せる。

資金繰りのめども立ったが、参考にできる手本はなく不安は消えない。妥当な利用料を設定するため、アンケートのはがきを演奏家たちに送った。1000通出し、約1割の人から返事がきた。開設を望む声に手応えを感じた。「ようやく音楽の分野で、力になれる仕事ができる」。希望が多かったグランドピアノ2台やチェンバロを備えた貸しスタジオがオープンしたのは79年11月、33歳だった。80年には音楽教室も始めた。



ピアノアートサロン
代表取締役 倉林京子

次へ▶▶

×

「オーナーいる?」。よく事務員と間違えられ、名刺を出すと驚かれた。「ピアノの音が変だ」といいがかりをつける人もいた。気がめいると、誰もいないスタジオで、かつて練習したモーツァルトやショパンの曲を弾いた。「無心で弾いていると落ち着けた。『好きな仕事をしているんだから』と元気も出た。音楽に癒やされたことは、数え切れない」。

スタジオは6部屋で、4、5人から40人まで入れる。コンサート前にプロの音楽家が利用することが多く、記念にもらったサインは200人分を超える。愛好家がミニコンサートを開き、勤め帰りのサラリーマンがピアノを弾く。音楽教室には、かつての生徒が子供の手をひいて来る姿も。

一流の演奏家としてスポットライトを浴びるのはほんの一握り。コンクールで優秀な成績を修める人も、夢がかなわなかった人もいる。そんな厳しい現実も見てきた。

とはいえ、音楽とのかかわり方は人それぞれだ。「音楽は、人の気持ちを伝えられる世界の共通語。十人十色の音楽のある生活作りをお手伝いしていく」。

今日もまた、音楽をめぐる物語が生まれる。＜文・写真、山縣章子＞

(毎日新聞2002年7月25日東京版から)